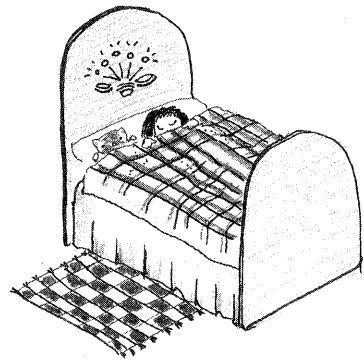


保育にあたって思うこと

岩上 節子



幼稚園教諭になって三回目の春を、もうすぐ迎えようとしています。

春になると思い出すこと。初めての入園式。お人形を片手に、真っ赤な顔をして、ひっくり返った声で独唱している自分の姿。別にそういう予定ではなかったのだけれども、結果的にそうなってしまったのです。

「それでは、これから、皆さんの担任の先生と一緒に、おうたをうたいましょう。」
その幼稚園の慣例に従って、お人形と共に、担任登場。（この「お人形と共に」というのも、当日いきなり言われてやったので、私の緊張はピークに達していました。）

「皆さん、『ちょうちょう』のおうたを知っていますか？」

「知ってる。」

「うたえる！」等々。

この力強い反応を頼りに、にこやかに私、

「では、一緒にうたきましょう。」

——結果。最初の「ちょうちょう、ちょうちょう、なのはにとまれ」は大合唱。でも、子ども達の「知ってる」「うたえる」は、ここまでだったのです。次のフレーズからは、誰もうたえず、担任の独唱。短いうたなのに、その長く感じられたことといったら！ 次の「げんこつ山のためぎさん」で、ようやく、皆業しめたのでまだ良かった、と自分を慰めつつ、私の「知ってる」「できる」と、子どもの「知ってる」「できる」は、言葉は同じでも、中身は同じではないのだということを実感させられた初日でありました。とはいえ、その日の自分の姿は、あまりにみつともなくて、今思い出すと、笑ってしまいます。

笑ってしまうといえは、入園式前日のこと。洗面所で髪をとかすふりをしながら、一生懸命笑顔をつくっていた時。「はじめまして。……と申します。これから……」などと台詞まで練習したりして。偶然通りがかった父の、見てはいけないものを見してしまったという様な困り果てた表情と、自分自身の気まずさはやはり、今でも笑ってしまいます。

さて、話ほもどりますが、とにかくいつも思うこと。言葉が違う、通じない!!

例えば——

「帰る前に、お手洗いに行ってらっしゃい。」

「はい。」

もちろん、実際に用を足している子どももいるのだけれど、十人くらいは、ただ手を洗って出てくるのは何故？

「先生、おて、洗、つ、て、き、た、よ。」

——私個人としては、「おしっこ」はあまりに露骨だし、「トイレ」というのも語調がきつい気がするし、かといって、外来語の「トイレ」に「お」をつけるのも……と、ない頭で考えた末に「お手洗い」と言ったのですが、「手を洗ってうがいをする」という習慣と混同する子どもがあまりに多いので、結局のところ、「おトイレ」「おしっこ」と言うようになってしまいました。実際、じぶんの指導案（頭で考えたこと）ほど、あてにならないものはないのでは……と思うこともあります。

自分にとつての「あたり前」が、相手には「あたり前」ではないという事実を、まざまざと見せつけられる日々。毎日毎日、失敗の連続で、落ち込むことばかりですが、考えたわりには不様な自分の姿とか、本当は笑い事ではないけれど、でも、思い出すと笑ってしまふ様な子どもとのエピソードを見つけられるうちは、教師になるべく、教師を演やっているかと思っています。いつか教師になる日まで。

とある幼稚園で一年、また別の幼稚園で一年、保育にあたって思うこと——を少し、つらつらと書いてみました。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）